

昭和戦中期横浜の都市生活誌(上)

——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から (2) 昭和12～14年

吉崎 雅規

● はじめに

本連載は横浜市磯子区の時計店に勤めた男性の日記から、昭和戦前期から戦後混乱期にかけての庶民の都市生活の実態を復元することを目的とする。くわえて日記の叙述から、当該期の都市横浜の世相や情景をひとつの地域資料として紹介することも意図している。なお、叙述にあたっては「個人史」の観点から下平政熙^{しもだいらまさひろ}という個人を視座に据えつつ、政熙の人生と社会との関わりにも留意しながら記述を進めていきたい¹。

本稿が依拠する日記とその筆者下平政熙については本連載第一回で解説をおこなっているが、改めて簡単に触れておく。

下平政熙は大正六年（一九一七）三月十一日、長野県下伊那郡上郷村南条（現飯田市上郷飯沼）に生まれた。昭和五年（一九三〇）一月二十日、横浜市磯子区西根岸町（現磯子区下町）の谷崎時計店に奉公するため来浜し、戦前期は同店に店員として勤める。昭和十九年三月五日に出征、同二十一年五月十七日佐世保に復員し谷崎時計店に復職。昭和二十三年一月二十日、磯子区滝頭町字浜（現磯子区中浜町）にて下平時計店として独立する。その後は時計店主として終生をこの地で暮らし、平成六年（一九九四）一月十日に死去した。

日記は昭和五年から平成六年まで全六十六冊が残されており、出征中の昭和二十年をのぞ

き、原則として一年に一冊ずつ記されている。日記は政熙の死後、長男の下平修嗣氏が所蔵していたが、平成二十七年に横浜都市発展記念館に寄贈された。

本日記をもとに筆者は平成二十七年に「時計屋さんの昭和日記——青年のみた戦中戦後の横浜」という特別展を横浜都市発展記念館で担当し、その内容は同タイトルの展示関連書籍で報告した²。

連載第一回では昭和五年から十一年の日記の記述から、昭和戦前期の横浜の都市生活の諸相を叙述してきた。連載第二回の本稿では昭和十二年から十四年の日記の記載から、昭和戦中期の横浜の都市生活の様相を検討したい。

なお、史料（日記等）の引用にあたっては句読点を付加し、吉崎の訂正・補足は〔 〕で示した。（ ）は日記原文に記されているものである。また引用文中に、今日では不適切とされる表現があるが、歴史資料であることを考慮して原文のままとした。

1 徴兵検査と日中戦争——昭和十二年

昭和十二年元旦

昭和十二年（一九三七）、この年下平政熙は満二十歳を迎える。

元旦、政熙は除夜の鐘を聞いてから、講義録の算術の勉強をして、夜が明けた。十時頃、主人・谷崎千久次に年賀の挨拶をして、福茶と歯

1 「個人史」「生活史」についての本稿筆者の捉え方については、本連載第一回の吉崎雅規「昭和戦前期横浜の都市生活誌——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（1）」『横浜都市発展記念館紀要』No.13、二〇一七年、を参照のこと。

2 横浜都市発展記念館編『時計屋さんの昭和日記——青年のみた戦中戦後の横浜』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年

固めの柿をご馳走になる。干柿を菌固めで食することは各地で見られる習俗でもあるが、下伊那は市田柿など柿の名産地として知られ、元旦の菌固めにも柿が用いられたという。千久次は長野県伊那地方の現高森町の出身で、店員にも政熙など伊奈の出身者がいるから、これは信州伊那の習俗が横浜に持ち込まれたものだろう。

柿を食べたあと、政熙たちは席を替えてお屠蘇とお雑煮を頂いた。それから「お上様」のまつと近所の根岸八幡宮に参拝して本年の無事を祈った。仕事は大晦日まで「目のまわる程急がしかつた」が、元旦は「さつぱりとした新年」を迎えて「〔数え〕二十一歳と成つた」。政熙は「昭和十二年を一層正しく過さう」と誓った。

家族との再会と帰郷

昭和十二年二月二十四日、横浜の政熙のもとに父下平準太郎と弟の財作^{さいさく}、そして妹の久保^{ひさほ}が訪れた。「待ちに待った同日夕方財作と父と久保が来た。実に八年ぶり〔実際は七年ぶり〕の対面であつた」。久しぶりの再会に「不安があつた」政熙だが、二十六日には横浜の名所を案内しながら親族との時間を楽しんだ。

さらにこの年、政熙は昭和五年に故郷を離れてから初めて帰郷する。前年の十二月一日から当該年の十一月三十日までに満二十歳になった男子は徴兵検査を受けなければならない。昭和十二年三月十一日に二十歳を迎える政熙はその受検対象者となり、故郷（本籍地）上郷村で徴兵検査を受けることになったのである。政熙は「あと百五回寝ると田舎へ帰れる。三百十五回御飯をたべると田舎へ帰れる。最後の奮発だ」（昭和十二年四月六日）と、数ヵ月前から故郷に帰ることを楽しみにしつつ、日常業務に励んだ。

七月十六日、「入店以来初めて御主人の許をはなれて父母の待てる故郷へ出発した」。桜木町駅で中央線が不通という情報を得て、信越線

まわりで帰郷の途につき、十七日、飯田線の桜町駅に到着した。

駅から母校上郷小学校はすぐ近くである。政熙は母校に入って奉安殿に敬礼をした。「思ひ出の樹木」もあった。第三校舎が新たに建てられ、校庭は広がっていた。上郷小学校から政熙の父母の家は丘の下にあたる。「見下した家々はほとんど当時のまま」で政熙は「本当に懐しかつた」。そして「思ひ出の我が家」に入った。弟（六男、昭和二年生まれ）の忠孝は登校しており家にいなかったが、八男の博照は「すぐなついて」くれた。博照は昭和六年生まれだから政熙が横浜に出てから誕生した弟で、このときが初対面である。昨年生まれただけの妹（三女）日巻は「顔を見ると泣き出されて困つた」。

徴兵検査

翌七月十八日、政熙は徴兵検査の「学科試験」のため「登校」した。会場は記されていないが上郷小学校だろうか。政熙は久しぶりに小学校時代の同級生と会う。「集まる人皆久しぶりで誰だか分からぬ人さへあつた」。徴兵関係の事務を扱う兵事係の挨拶があつて講堂に座った。一、二の試験は「わけなく」済んだが、三の試験には「勉強不足」を感じていくつかの問題をやり残した。終了してから説明を聞いた。

七月二十一日、「本日は日本男子として一生に一度の名誉ある徴兵検査の日である」。政熙は身を清め、鎮守の八幡社に参拝して上郷村役場に集合した。

皆整列して検査場へ入つた。司令官の挨拶ありて体稽場へ入つて他村の済むのを待つた。僕には三十八番の札が渡された。呼ばれて衣類を脱ぎて静かに待つた。一番で身長、胸囲、体重を計つた。坐つて次を待つた。二番では関節を計り眼を計つた。三番の係員休みて四番で眼の色見分の検査及耳の検査をし

た。五番では陰部の検査をして体を丈夫にして置けと云はれた。服装を整へて県兵事係の前へ出て生年月日を問はれた。次に斉藤大佐殿の前へ出た。耳の検査へ廻された。済んで再び司令官の前に立つた。時計修繕の事に就いて種々問はれて第一乙種第一補充兵と云はれた。村兵事係へ報告して札を返して退いた。皆終了して批評があつて外へ出て記念写真をとつて帰る。夜は附近の四人で大宰楼で芸者一人上げて酒十一本平げてふらへになつて帰つた。

徴兵検査により若者たちは体格によって甲・乙(第一・第二)・丙・丁・戊の各種に分けられる。甲と乙種のうち、現役兵に認定された場合はすぐに入営しなくてはならないが、政熙は補充兵とされたため、即座には入営しない。現役兵として陸海軍に徴集された男子は昭和十二年度十八万七千人である。

兵士の出征と「戦捷」行事

政熙が帰郷する直前の昭和十二年七月七日、北京郊外盧溝橋付近で演習中の日本軍と中国軍の間で衝突事件が発生、この事件をきっかけに日中戦争がはじまる。

政熙の日記にも翌八日、「北京支那兵と交戦す 号外」と欄外(「特別記事」欄)に記される。その後も、「内地一部へ動員令下る 臨時ニュース」(七月十五日)、「出征軍人送り出すのを所々に見受ける」(七月三十日)、「盧溝橋に勃発した支那事変も大きくなり所々に大々的に動員下令となった」(「七月の感想」)と戦争によって兵士の動員がなされる様子が記される。

八月、戦局はさらに拡大する。八月十三日には上海で海軍陸戦隊と中国軍が交戦を開始、政熙も日記に「上海情勢益々悪化し来る。空中戦初まる。一機落すと云ふ。爆撃機至る所へ爆弾投下せしが命中せず」(八月十四日)、「十数

機支那機を落す。我空軍のい〔威〕力物すごし」「号外乱れ飛ぶ」(八月十五日)などと中国戦線の状況を記している。

兵士の出征も続いた。政熙は時計店で仕事をしながらもその様子を観察しているが、出征の情景のみならず見送る庶民の心情まで推し量って興味深い。

勇ましい軍歌のブ〔ブ〕ラスバンドに送られて出征軍人が来た。バタへ〜と花火がきこえて〇〇君万歳の歓呼の音が近づいて来た。見送る者手に手に日章旗をふりかざし楽隊を先頭に国旗にかこまれて通りすぎ行く。家々にはへんぼんと国旗がひるがえつてゐる。店へ来られるお客様も皆国旗一本持って入つて来らる。皆国旗を持たねば片〔肩〕身がせまい様だ。しばらくすると号外が飛んで来る。再びきん張する。臨時ニュースは我軍の勝利を伝えてくれる。〔中略〕本日の軍国日本の風景は所々にえがき出される。(八月二十六日)

毎日出征軍人が送られて、終ると第二次第三次と動員令が来た。どこの家にも国旗はたてられ、祝出征の門が所々に出来てゐる。ブ〔ブ〕ラスバンドに送られて出征する軍人も毎日続いた。終ると又動員命下ると云ふ様な日だ。(「八月の感想」)

あいつぐ軍人の出征を見て政熙も「いづれ自分の〔も〕出られるものとかくごして業務に励んでゐる。休みには体をきたへる為海水浴に行つた」(「八月の感想」)、「寅殿〔同僚の店員〕兄様も二補充兵で動員されるさうだ。我々にはいつ来るか。早く来ればよいと思ふ」(八月二十八日)と、出征への覚悟を固めている。九月二日、政熙のもとに有事の際には「電信兵」として徴兵される旨の連絡があった。時計修繕の技術に着目されたのであろう。

秋、中国での戦線は華北と華中で拡大しつつあった。十月二十六日上海派遣軍は上海近郊の要衝を攻略、上海は日本の制圧下にはいる。十月二十九日、上海戦線の「戦捷祝賀」行事が横浜公園グラウンドでおこなわれた。町では早朝から学生が日の丸の小旗をふりかざし、夕暮れどきからは提灯行列に変わった。提灯行列は横浜公園をスタート地点として伊勢山・伊勢佐木町・本牧など市内各所をめぐる³。

政熙もこの様子を見物する。昼間は「旗行列」があり、夜の提灯行列は「色々と戦車や飛行機・大砲等の飾をつけて堂々とねり歩いて、手に手に提灯をつけて赤一色にぬりつぶされて」いた（「十月の感想」）。ブラスバンドの演奏もあり、人々は「思ひへの装をして行進した」（十月二十九日）という。

工業都市・横浜

政熙の日記には、折に触れて横浜のさまざまな風景が点描される。なかにはこの時期特有の都市横浜の様相を垣間見せる叙述もある。

昭和十二年六月二日、この年の横浜開港記念祭は「開市以来の大祝典」⁴となった。今回の記念祭は「工業都市の飛躍を約束」⁵する横浜市営埋立地の完成を祝うものでもあったからである。

横浜市は生糸貿易の落ち込みから、工業立市をこの時期の基本方針としていた。そのため京浜工業地帯の造成を企図し、工業用地を得るために臨海部の埋立をおこなう。その中心が守屋町・生麦町地先の市営埋立地であった⁶。

政熙もこの日、伊勢佐木町近辺で記念祭の仮装行列を見物している。

お昼を頂き開港記念祭の大名行列、開港当

時の仮装行列を見てオデオンへ入る。夕方出て野毛町の演芸を見て、野毛山公園で花火を見て、かへりに磯子の演芸を見てかへる。

〔中略〕行列には大名行列・井伊大老及ペリ等開港当時の行列に、錦の御旗をひるがへしたる官軍の行列の中に西郷隆盛も入り、外人の風俗及農兵隊も続く。

翌六月三日には「ミス横浜」による自動車パレードがあった。「ミス横浜の令嬢連が幾台かの自動車にのつて花をなげつつ廻つた。とても人気を呼んだ」（「六月の雑感」）。

昭和十二年六月二日のこの記念式典は、開港都市として発展してきた横浜の歴史に、工業都市としての性格があらたに加わったことを象徴的に示すものであったようである。

また、政熙の日記には、鶴見・川崎付近に建設中の工業地帯の記述もある。

自転車にて鶴見署へ行く。途中養老様（日本搾油）・戸部署へ寄る。鶴見署で集金をして日本電力会社の集金をした。現在の鶴見、川崎方面の工業地帯の発展は目ざましいもので隣に東京電燈、及金と銀の（交換）銅管会社、及大瓦斯タンク、及カ〔ガ〕ス業会社、浅野セメント会社等の大建物が現〔埋〕立地の原野の中に見えた。（昭和九年十月二十六日）

昭和十七年には「鶴見矢向町の叔父様〔孫市〕の作業場をさがした。一面よしの原であった所が七八年すぎた今日は林立した工場と化して居た」（昭和十七年十一月八日）と、その変貌に驚く記載もある。

昭和八年の鶴見区の工場数（常時百人以上）

3 『横浜貿易新報』昭和十二年十月二十九日、三十日付

4 『横浜貿易新報』昭和十二年六月二日付

5 『横浜貿易新報』昭和十二年六月三日付

6 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』第一巻（下）、横浜市、一九九六年、九六頁以下

は十八、労働者数は六千九百四十一人、同十七年には工場数(同)五十三、労働者数は四万三千七百五十四人。横浜市全体では昭和八年の工場数六十九、労働者数三万三千六百五人が、同十七年にはそれぞれ二百三十五、二十四万五千三百二十七人と大幅な伸びを示した⁷。政熙の日記はこうした横浜の工業都市化を庶民の視点から裏付けるものともなっている。

2 戦争への熱狂と好景気——昭和十三年

軍人と遺骨の「凱旋」

昭和十三年(一九三八)元旦、谷崎千久次は明治神宮と宮城(皇居)に詣でた。政熙たちはその帰りを待って、時計店の同僚たちと食台を囲み例年の通り新年の挨拶をした。政熙は近くの根岸八幡社へ初詣でに行き「皇威宣陽[揚]」を祈り、日記の「年頭所感」には「皆非常時の新年を迎えて益々皇軍の奮闘を祈る」と記した。前年にはこのような社会情勢を意識した新年の感想は記されていない。

一月十六日、政府は「国民政府を相手とせず」との声明を出し、中国側との和平交渉を打ち切った。戦局はいよいよ長期化の様相を呈するようになる。

このころ政熙は町に中国から帰還した軍人の姿を見るようになった。

滝頭で凱旋軍人を見る。皆日にやけた軍服姿で喜[嬉]しさうだ。出征の悲壮であつたに比して大いに元氣であつた。(三月五日)

戦争の長期化により横浜出身の兵士の戦死者も増えていった。政熙も三月十三日に遺骨の

「凱旋」を見ている。

悲しい遺骨の凱旋を見る。雲低くたれ込め、雪すらまじる寒き夕方、悲しい音楽にとび職を先頭に、小[少]年団・楽隊・軍人会員に守られ、戦死者の写真・遺骨・遺留品と、近親者に国防愛国婦人会の静かな足どりで帰るを見て、思はず脱帽して敬礼した。涙のわき出るをおぼえた。(三月十三日)

横浜市内の戦没者は毎年招魂祭で合祀される。その数は昭和十一年(十月二十五日)では四人だったが、十二年(同日)では十八人、十三年(十一月八日)は二百八十九人とこの年急増する⁸。

三月十三日の日記欄外には、「ヒトラー入城[城]、独、オーストリアと併合す」と記される。昭和八年に政権を握ったヒトラーはオーストリアの併合を企図。昭和十三年三月十二日、ドイツ軍をオーストリアに進駐させ、十三日にオーストリアの首相がドイツとの合併を宣言した。ヨーロッパ情勢も戦雲に包まれようとしていた。

戦争の報道と展覧会

政熙は日中戦争の状況を主として新聞から得ており、日記欄外には戦況が簡単に記されている。そのほか、政熙はニュース映画からも戦争の状況を視覚的に得ていた。ニュース映画はもともと新聞社の販促活動の一環として映画館で流されていたものだが、戦地の状況をニュースとして放映したことから、日中戦争の開始とともに盛況をみることになった。ことにこの時期は劇映画一本にニュースを添えた興行形態が横浜などの大都市では主流になる⁹。

7『横浜市史Ⅱ』第一卷(下)、四八七頁。原資料は神奈川県商工課『神奈川県工場名簿』(一九三三年三月)、厚生省『常時百人以上ヲ有スル工場鉱山等調』(一九四二年一月)

8『横浜市史Ⅱ』第一卷(下)、三三一～三一二頁

9『横浜市史Ⅱ』第一卷(下)、八三五頁

昭和十二年十月二十四日、政熙は「ニュース劇場へ戦争実写を見に行」った。どの映画館かはわからないが、ニュース映画の専門劇場が横浜にも生まれていたのである。十一月七日にも「若主人とニュース映画を見に行く〔中略〕苦勞が際〔察〕せられた」と政熙は記す。十一月十九日には「皆揃つて帝国館及花月ニュース劇場へ入る」。昭和十三年五月二十二日にも「花月ニュース映画を見た。〔中略〕徐洲の戦線を見」という。花月ニュース劇場は伊勢佐木町にあったニュース専門の映画館で、伊勢佐木町にはこのほか朝日ニュース劇場も存在した。

戦争に関する展示会も催された。昭和十三年五月十五日、政熙は「夕方根岸校で横須賀鎮守府貸下げの戦利品及遺品の展覧会を見る。五月二十二日には「オデオン百貨店で戦利品及生々しい遺留品やパラノマ〔パノラマ〕を見た。徐州陥落により二十日から二十一日にかけて市内には旗行列があったから、その戦線関連の展示だろうか。

このほか政熙はラジオからも戦争の状況を聴く。昭和十三年十月二十七日午後六時半。ラジオから「臨時ニュースを申し上げます」との音声流れ、この日の五時半に日本の陸海軍が武漢三鎮の攻略に成功したことを「力強く発表せられた」。政熙たちは「思はず万歳を叫んだ」。そして、「皇軍の労苦感謝して又貴き犠牲となられた英霊に感謝の目〔黙〕 俣を捧げた」¹⁰。

政熙はさまざまな媒体で戦争の状況を刻々と知り、その熱狂に巻き込まれていったのである。

同僚の出征、そして歌劇

昭和十三年六月十九日、同僚の奥田季彦が出征することになった。奥田季彦は谷崎時計店の店員だが、谷崎家の親戚でもあった。昭和七年

に十九歳という政熙のメモがある（昭和七年日記末尾）からこの年二十五歳であろう。奥田の出征は昭和十年三月に続いて二度目のようである。

赤飯を頂いて待つて奥田様の出征を送つた。両陛下万歳、奥田様万歳をとなへ、君が代のそう〔奏〕 楽には心が引しまった。氏神様へ参りて水上署へ着く。少し休憩して五時に水上署で署長を初め警官も並びで〔ママ〕、君が代及万歳をとなへて出発した。県庁正門でもう一回となへて、爆竹の立〔音〕は盛になり、楽隊を先頭にして征途に着いた。実に立派なものであつた。

この日、奥田の出征を送つたあと、政熙は横浜宝塚劇場へいく。

横宝へ入る。小〔少〕女歌劇・レビュー及田園交響楽等とてもすばらしいもの計りであつた。

昭和十年四月一日に馬車道に開館した映画館・横浜宝塚劇場（通称横宝）は、オデオン座・世界館とならぶ横浜の洋画封切館であるが、映画上映のほかレビュー（一年のできごとを題材とする流行歌やダンスから構成された歌劇）が上演できる舞台装置も備えていた。横宝では宝塚少女歌劇、東宝劇団、エノケン、ロッパなどさまざまな歌劇・喜劇が上演され¹¹、戦前のモダン文化のひとつの拠点となった。

政熙は奥田の出征を見送つた後、「苟しくも我身に大日本帝国の男子として最も光榮ある動員下命ありたる時を予想して一筆啓上す」として、ノートにみずからの心構えを記している。

10〔戦前ノート〕（4—その他5-1-6）。昭和十三年十月二十七日

11 小柴俊雄「横浜の劇場3 横浜宝塚劇場」『郷土よこはま』一二六、一九九五年

いよへピンセット持つ手〔に〕銃採りて戦線へ逃〔赴〕く事になったとする。自分は補充兵で未教育ではあるが電信兵と云ふ証書は戴いてある。如何なる部所〔署〕にたちて厳格なる軍事教育を受くる事とならう。

規律正しい軍隊生活へ入ればもう大君に捧げた体となるのだ。上官の命令に服従して行動をとるのである。通信に無線に保線警備に建築に一定の定められたる職務に其の本分を全うして力の限り奮闘するのだ。

五ヶ条の詔勅を守り以て軍人精神を發揮〔揮〕して己が職分に邁進するのだ。殊に通信連絡の早い遅いは軍の行動に重大なる影響を及ぼすのだ。軽き身にこの重大なる任務を負ひて身は戦場の露と消えるも尚足らぬのだ。

しかし今は帝国在郷軍人として己が銃後の職務に精勤し、精神を正しく保ちて国家の資源開発に一致協力して各自の不自由は忍びて軍の行動には出来る限り協力して、若し我身に召集下令を受けた時は粉骨碎身奮闘して国家の干城となる心掛である¹²。

政熙は戦争にいくことを予期し、そのときには国の命令に従って行動することをみずから誓っている。そして、召集されていない現在は「銃後の職務」に精勤し、生活の不自由を忍んで、精神を健全な方向に持することも心懸けようとする。こういった心情は戦時期の庶民に一般的にみられるものだが、政熙の日々の生活には享樂的とされる少女歌劇の観劇が同時に含まれていた。戦時の緊張感とモダニズムは同居していたのである。

簡閲点呼

昭和十三年六月二十七日、政熙のもとに「簡閲点呼状」が届いた。

政熙など第一補充兵や、予備役・後備役の下士・兵卒を、点検・査閲・教導のため召集することを簡閲点呼という。毎年、七月から八月にかけておこなわれ、その状況報告は翌年の開催前に各市町村から所轄警察署に提出される。簡閲点呼の成績は分会の評価と各市町村の名誉にもかかわる¹³。そのためか、政熙は本番前にその予習を三日間かけて受けることになった。

八月十七日の夕飯後、政熙は「仕度して滝頭校〔小学校〕へ行き点呼の練習をす。勅諭〔諭〕、郷軍の訓示、敬礼、分隊の集合の練習をしたが、未教育の自分には誤ちが多かつた」。翌日も予習である。「夕飯を頂き滝頭校へ行き点呼の予習をす。補充兵・在郷軍人の心得を訓示されて教練にうつつた。右に向を替へ膝射、伏せの練習をして軍人手牒を求めてかへる」(八月十八日)。八月十九日は「点呼予習教育終日」である。政熙は「各兵種のせつめい」を受け、「一列にな」って「木銃を持つて突撃・突込め」を練習した。さらに「三人づつで執行官に官・性〔姓〕名を名乗る」予習もおこなった。

そして昭和十三年八月二十三日、磯子区に軍籍のある在郷軍人の簡閲点呼がおこなわれた。政熙は五時半に起床、服装を整えて食事を摂ったのち、「奉公袋を携へて」会場の杉田小学校へ参会する。奉公袋は応召の際に持参する袋で、政熙はこの年の七月七日に購入している。政熙は寄留第三分会へ入った。執行官の挨拶があつて閲兵式をおこなう。政熙は予習通り姓名を名乗った。奉公袋の調査がある。点呼令状を提出し、補充兵証書へ押印された。「日ソ関係

12 「(戦前ノート)」(4—その他 5-1-6)。「我若し召集を受けしなら」。年代は付されていないが、昭和十三年六月十九日と八月二十三日の記述に挟まれている。

13 河西英通「地域の中の軍隊」『岩波講座アジア・太平洋戦争』6、岩波書店、二〇〇六年

及戦闘状況」を聞き、分列式・分隊教練をおこなう。終了して体操場へ入ると、国歌合唱、勅諭と勅語の奉読、訓示があり、成績の発表を聞いて終了した。

以上は日記の記述だが、政熙は別のノートにこの日の簡閲点呼についてその情景を詳細に書き留めており、史料編の史料1として全文を翻刻紹介する。

好景気と時計

昭和十二年の日中戦争勃発後、横浜の商業界は軍需景気によって売上げの増加をみるようになった。

谷崎時計店でも時計がよく売れるようになった。名古屋の長谷川時計店のエピソードだが、日中戦争の開始以来「応召者に持たしてやる腕時計の需要は増加した」という¹⁴。出征兵士への贈答品として腕時計は購入されたようである。

昭和十三年三月二十六日、政熙は「金一ケと計十二個の〔時計〕大量を販売して新記録をとった。二百十余円を一時に売る。とても喜〔嬉〕しかつた」と記し、これまでの販売の新記録を更新した。昭和初期の一円をおよそ現在の二千元と考えると、四十二万円ほどの売上げを得たのである。

十一月、「お上様〔まつ〕も毎日売つて来る。電気局の新採用の運転手様は毎夕五六名づつ来てまた、く間に五六ケ売つた。僕は練習所にて一寸一週間に二十個売る。約一ヶ月間に三打〔ダース〕の売行を示した」（昭和十三年十一月末尾）。十二月四日、政熙は「練習所（巡査教習所）に行き、時計など合計九個百二十二円六十五銭を売り上げた。ただし「売れる品は国産品ばかり」（「歳晩所感」）である。十二月二十五日には賞与をもらう。「ボーナスも破格の温典に浴した」とあるから、谷崎

時計店の売上げ増加を反映した多額のものであったようだ。この年の政熙の給与・賞与額は不明だが、その前年（昭和十二年）の二月から七月の給与は六円五十銭、八月からは八円に昇給、十二月の賞与は十円を得ている。

谷崎時計店の売上げの上昇は、鶴見・神奈川の工場地帯の「軍需インフレ」が横浜の商業界にも影響し、「全市を潤ほしてゐる」という状況から生まれたものだった。「市民の購買力は昨年よりぐんと増したが、節約々々の宣伝に戦時成金時代の馬鹿騒ぎはない代り堅実な底力ある景気」と観測されており、「実用的高級品が比較的売行」がよかったという¹⁵。

十一月二十日の定休日。谷崎時計店では店を閉めてみなで「蛇の目」で「ロース」牛を食べにいき「皆舌づつみを打つ」た。「蛇の目」は伊勢佐木町にある牛鍋屋の老舗である。業績好調による大盤振る舞いだらうか。そのあと、政熙たち店員は銘々に「ザキブラ」（伊勢佐木町の散歩）を楽しみ、政熙は「懸案」のズボンと「永々望んで居た」マイナーハーモニカを購入した。ハーモニカの演奏はその後政熙の楽しみのひとつとなる。

戦争の開始とそれによる軍需景気が時計店に好況をもたらし、政熙もその余沢を牛鍋とハーモニカというかたちで得たのである。

3 召集令下る——昭和十四年

「時計屋の暴利」

昭和十四年（一九三九）元旦、政熙は「農村の状況を考へて見て本年も節約主義を以て煙〔草〕、酒を禁じる様心掛ける」と節約を誓い、また「身には軍籍のあるを忘れずに一朝有るの時は奮闘す可く心掛ける」と戦地に向かうことを予期してみずから奮い立たせた。

14 吉田浅一編『名古屋時計業界沿革史』商工界、一九五三年、一三九頁

15 『読売新聞』「神奈川読売」昭和十三年十二月一日付

三日には背広を着用して店の同僚たちとバスで川崎大師・代田不動尊・佐倉宗吾郎（東勝寺、成田市）に初詣でにいき、「愉快に参拝」をした。

しかし正月早々、谷崎時計店と時計業界に水をさすように事件が発生する。昭和十四年一月五日の新聞夕刊に「時計屋の暴利」と題した記事が掲載された。政熙のメモ¹⁶によると、時計屋では原価十七円の時計（クロム8形セイコー）を三十六円で売るなど、「何れの品も二十割から三十割の暴利をむさぼって居る」という内容である。

この新聞記事に店員一同は「何と云ふ取返しのつかぬ事を掲載したものであらう」と真っ青になった。店の信用回復のため種々の対策をみなで考える。翌朝になると、早速客より抗議がきた。店員の宮嶋は得意先の横浜税関に様子を見に行ったが、問題は意外にも大きくなっており、新聞を切りぬいて購買部へ行き「こう云ふ商人を指定して置くのは止せ」と怒鳴り込んで来たものもいたという。

まつは磯子署の経済係へ出頭を要求され、経済巡査に対して「一度の注意もなくどうしてこんな事をしてくれたか、大事な得意先を目茶々にされた」と「今日は云ひ度い事を云はせて下さい、とことわつてびし々とやつた」という。主人千久次は県会議員に相談してまわった。結果として、谷崎時計店は安価で販売していたことが判明し、「雨降って地固まる」結果となったが、谷崎にとっては小さくない危機であった。政熙も商人としての信用の大事さを知る経験になったようである。

金に関する政策と時計店

この問題の背景には、政府の金に関する政策があった。金は国際決済において昭和戦前期に

重要な役割を果たす。とくに満州事変を契機に、政府は国内の金の保有増加を目指してさまざまな施策を実施する。昭和六年、政府は金輸出の再禁止を決め、昭和七年三月には大蔵省が金を時価で買い上げることを決定した。昭和十三年八月からは金の使用は医療用をのぞいて禁止された。

昭和十四年一月五日、平沼騏一郎内閣が成立した。この日、新たに大蔵大臣となった石渡莊太郎は経済政策の方針のひとつとして「金集中を更に徹底」することを挙げる。「国内的には現在の金集中策が相当成績を挙げてをり、さきに調査した金貨、金塊等保有金を将来強制的に買い上げることも一方法であらうが〔中略〕まづ国民が自発的に金を政府へ出して欲しい」¹⁷と述べた。政府は金の使用を制限するとともに、民間にある金も集めようとしていたのである。このような情勢下、時計店にも影響があった。昭和十四年二月、政熙は「最近金献運動の為金側は皆クロム側へと変り種々の買取り及つぶしに廻すが多い」（二月末尾）と記した。側とは腕時計・懐中時計の外装部分のことである。金を政府が集める国策によって、時計の側を金メッキからクロム（銀白色の金属）など別の金属によるメッキに交換する人が多くなってきたのである。昭和十四年三月、政熙は二十日の公休日も休まずに仕事をする。「国策に沿つて金を政府へ売却する者多くなかへ急〔忙〕がしかつた」（昭和十四年三月末尾）。

昭和十三年十一月、政府は金貨・金塊の所有を政府に申告させる調査を行った。このときの調査は大口が中心だったが、昭和十四年には七月一日を期限として第二回の金の国勢調査を行い、比較的小口の金の所在まで把握しようとした。この期日前に金を売るものが多くなった。「七月一日金の申告の前に金を売る人甚だ多

16 「(戦前ノート)」(4—その他 5-1-6)。昭和十四年一月五日
17 『東京日日新聞』昭和十四年一月六日付

く、時計は側入替が多く手はきずだらけになる程であった。これも国家の為国策に副ふ御客様に援助して戦地の友軍に負けじと奮闘した」（昭和十四年六月末尾）。

このような時計の側の入れ替えにもなって、代用となる金属の価格も上昇する。このころ、読売新聞の神奈川版（「神奈川読売」）に「金売り部隊の悲鳴—時計側の物すごい昂騰に」という見出しで次のような記事が掲載された。

クローム・ニッケル・ステンレス等の時計側が物凄い昂騰を示し、愛用の金側を売つて国策に協力しようとする人々の間に幾多の悲喜劇を醸し出してゐる。—けふの“金”の国勢調査を前に、数日前からどこの貴金属店も金売部隊の襲撃を受け転手古舞の盛況を見せたが、このため金側の代用品たるクローム・ニッケル・ステンレス側が何れも品不足、六割以上も値上りを見せるといふ状態で、十四金十型腕時計側を外しこれを同型のステンレス側に替たところ、差引僅か五十銭しか戻らなかつたといふ例もあり、県当局事変課では去月十二日の業者懇談会にこのことあるを予想して警告し、業者もまた自粛を申合せてゐたにも拘はらず、背徳行為を敢てすることは時局下にふさはしくはない行為であると、県経済保安課に対し暴利取締規則違反として徹底的取締を懇請する¹⁸。

しかし、谷崎時計店にとっては「ケース入替もなかへはかどらないを見ても仕事丈でやつてはなかへ金が入らない」（昭和十四年七月一日）と記すように、原材料の価格高騰を消費者に転嫁しない良心的な業者にとっては、なかなか儲けにつながらなかつたのである。しか

し、「時計屋の暴利」の記事のように、時計店がこのような状況を利用して利益を得ていると見る向きもあった。

召集令下る

昭和十四年四月七日午後、政熙が時計店で接客しているときに、郷里から電話があった。「名誉ある召集令下命との通知」であった。政熙は横浜に「寄留」（本籍地以外に居住）しているため、故郷（本籍地）上郷村の実家の家族に召集令状が手渡され、その知らせを電話で受けたものであろう。

翌八日、政熙は店の主人千久次と根岸八幡に詣で、神主に祝詞をあげてもらふ。玉串を奉納して帰宅。磯子区役所の兵事係に挨拶にいって、千久次と牛鍋の名店「荒井屋」（曙町）にいき、肉をご馳走になる。時計店には知り合いが挨拶にやってきて、近所の人たちも饞別をくれた。夕食は政熙の送別会となった。まは青木周三横浜市長から自筆の旗（日の丸）をいただいできた。前稿¹⁹で述べたが、まは結婚前から青木周三と知り合いであった。

九日、政熙は軍服に着替え、七時から店の前で答礼した。八時に出征を祝う式がはじまり、政熙は「出征軍人」として挨拶をおこなう。そして政熙は店から楽隊を先頭に根岸橋まで行進した。政熙は「盛大なる見送を受けて感激しつつ」電車に乗り、郷里を目指した。主人の厚意により出征までの短い時間を親元で過ごすことになったのである。

政熙はのち（昭和十四年八月）に、このときのことを思い出して詳細にその情景をノートに書き記しており、史料編に原文を翻刻した（史料2）。

政熙は四月九日の夜六時に飯田線の元善光寺駅に到着。「恰も氏神様の夜祭とて沿道には国

18 「読売新聞」 「第二夕刊神奈川読売」 昭和十四年七月二日付

19 前掲、吉崎雅規 「昭和戦前期横浜の都市生活誌—横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（1）」

旗がなびいて自分を迎へて戴いた様な心地で」我が家へ戻った。横浜で「熱誠をこめて」歓送されたことを思い出しながら家に入ると、家の中は案外静かだった。母は夕飯の仕度していた。しばらくして父は静かに臨時召集令状を見せてくれて、政熙は無言のまま拝読した。

翌十日、政熙は上郷村役場へ行つて「日取」を決めて帰ってきた。出征日の日程だろうか。この日、政熙は「獅子舞を十年ぶりで見ると懐しかった」。十一日、矢作田の親戚の家に行き、「種々御馳走になる」。

十四日、「いよ〜待ちに待った出発だ」。八幡社に詣でて小学校に向かう。上郷小学校で政熙を送る式があり、華々しい見送りを受けて政熙は車中の人となった。「男子の本分を全うして務める時が来た」と政熙は心を引き締める。この日政熙は横浜の時計店にもどり、明日十五日に入営である。

入営、即日帰郷

昭和十四年四月十五日、政熙は五時半に起床。朝飯を食べて谷崎千久次と妹の久保とともに電車に乗った。政熙と同じ出征兵が大勢乗りこんでくる。政熙は「共に第一戦〔線〕」に赴くような意気込みで車中であつた。政熙は「相模ヶ原」駅で下車する。小田原急行相模原駅は昭和十三年三月一日の新設である。そして九時頃、政熙は「新しい建物」の電信第一連隊の営門をくぐった。

現在の相模原市域には、昭和十二年九月三十日の陸軍士官学校の移転を皮切りに臨時東京第三陸軍病院（昭和十三年三月一日開院式）、陸軍造兵廠東京工廠相模兵器製造所（昭和十三年八月十三日開所式）、陸軍工科学校（昭和十三年十月一日開校）、陸軍通信学校（昭和十四年五月二十日転営）、陸軍衛戍病院（昭和

十五年三月十三日開院式）と続々と軍の諸機関が集まり、「軍都」が形成されつつあつた。

電信第一連隊は昭和十四年一月二十二日に中野から神奈川県高座郡大野村（現相模原市南区）に転営してきた。兵舎の建坪は六千六百八坪、延建坪は八千三百二十九坪。現在の小田急相模原駅の北西側、米軍相模原住宅地区のあたりがその所在地である²⁰。

政熙は第三中隊六班に入り、種々の訓示を受けたあと、軍服を支給され着用した。しかし、体格検査場で健康診断を受けた結果、脚気と診断され即日帰郷を命じられる。脚気はビタミンB1の欠乏症であるが、戦前の日本では結核とともに国民病と言われた。脚気は白米の摂取と関係があるとされるが、谷崎時計店では店員に「白米をおなかいっぱい」に食べさせた。だから、谷崎時計店の店員には脚気になる人が多かったという²¹。

実際、政熙は入店当初より脚気に悩まされている。昭和六年十一月二日、政熙は「かつけ〔脚気〕の気味あり」「足がむくんで来て桑とくぬぎの芽をせんじたのをのみなどした」と記した。十一月十二日、政熙は実費診療所横浜支部病院で診察を受ける。伊勢佐木町の裏手、福富町一丁目に所在した低所得者のための病院である。「十時頃実費病院へ行き見てもらつたらやはりかつけ〔脚気〕」と診断された。昭和十二年十一月にも「又少し脚気の気ありて注意して居る」（「十一月の感想」）とあり、政熙を悩ます慢性的な病でもあつた。

即日帰郷を命ぜられた政熙は、その日の日記に「今朝迄の元気はどこへやら、しをれてかへる。横宝へ入れて頂き、夕飯を頂き、そつと帰る。軍人会の人に会ふ。帰郷を□で喜んだのは主人のみ、自分は残念なのと申訳ないので一ばいだ」と記した。日記には記されないが、店に

20『相模原市史』第四巻、相模原市役所、一九八八年
21 平成二十七年六月に渥美紳一氏からうかがつたお話しによる。

もどった政熙は涙を流していたことを、谷崎時計店の娘・紀美子氏は八十年近くたってもよく記憶していた²²。

翌日、政熙は「店へ出るのも恥かしい様な気持ちで」店の裏を掃除した。「近所の方々へ即日帰郷の理由を話し、一方ならぬ御世話になり御役に立てなかつた事を云つてわびて廻つた。中には気の毒だと云ふ人もあればよかつたと云つてくれた人もあつた」。

なお、この日の入営と即日帰郷についても政熙はノートに詳細な記録を残しており、史料3で紹介する。

戦時のアウトドア

戦時下、政熙は休日にハイキングや水泳に出かけるが、昭和十二年に日中戦争がはじまってから、こうした「アウトドア」は娯楽以外の意味あいも持ちはじめていた。

昭和十二年十月十二日、政熙は「待ちに待つた栗拾ひ」に「出勤」した。「この非常時に呑気な事は致しては居られぬが、しかし一朝有事の際には心身のたん練の為御言葉に甘えて行つた」。政熙は「リユクサツクに一ぱいしよつてかけ足で先頭を走つて見たが、つかれて上り道の時はへとへになつた。これでは兵隊も然〔駄〕目だ」（「十月の感想」）と戦争を想定して感慨を記す。

昭和十三年九月十八日の公休日。「いなご取りをし乍ら心身鍛練の目的を以てハイキングをした」。昭和十四年七月十六日、政熙は根岸海岸で海水浴をするが、これは「体をきたえる意味で海水浴に行」つたのである（七月末尾）。

昭和十四年十月二十日、政熙は「体位向上の目的を以て」神武寺・鷹取山（「湘南アルプス」）にハイキングに出かけた。まずは神武寺

で「皇軍の武運長久を祈願」する。山々は横須賀の海軍基地に近く、「要塞地帯なる為か」あまり手入れもなされていない。政熙は「思ひを大陸の戦線に馳せ、今皇軍がこれ以上の道なく深い山奥に残敵の掃蕩に一命をすてて奮闘する皇軍の労苦を偲び」ながら山を歩く。

途中で政熙は陸軍の軍人にも会う。政熙は「自分も入隊出来れば今頃は大陸で国家の干城として励んで居るはずであつたがとは、思ひ出すまいと思ひ出すまいと思つても心の中に湧いて来る」と軍人になれなかつたことを悔やむ。しかし、この日のハイキングは「其の目的体位向上及修養の点を見出したのも全く意義ある一日」であつた²³。

昭和十六年一月二十日、政熙は藤棚町内会（現西区）の人たちと菟狩りに永野村（現港南区）の奥へ入った。「ホーイ〜と呼びひ乍ら、ばらや笹藪の中をもぐり乍らおし立てて進む様は、大陸の山嶽戦もこれ以上かと思ふ如くであつ」と、ここでも中国での戦線を想起する。

ハイキングは都市生活者の運動不足改善のため一九三〇年代から推奨されるようになっていた。日中戦争がはじまってからは戦地に赴く男子の「体位向上」をスローガンに、政府はハイキングのほか水泳・スキーといった「アウトドア」スポーツを奨励することになる²⁴。政熙の休日の「アウトドア」も国策の影響を受けており、そしてまた戦場を意識させられるものであつた。

22 平成二十七年六月にアリガ・キミコ（紀美子）氏からうかがつたお話しによる。

23 「（戦前ノート）」（4 その他 5-1-7）。「ハイキング」

24 高岡裕之「観光・厚生・旅行」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、一九九三年

◆史料編

史料1 横浜の簡閲点呼

簡閲点呼 昭和十三年

炎暑甚だしき八月二十三日、我等磯子区に軍籍を有する在郷軍人の中、名誉ある簡閲点呼を受ける者百七十名は続々と点呼場たる杉田小学校へ集合した。参会者の中には颯爽たる軍服姿で胸には幾多の勲功を物語る勲章徽章を佩用したる既教育兵や、団服に戦闘帽を被りたる者、未だ改正された新装軍服に星の無い召集を受けたる補充兵も右の乳あたりには帝国在郷軍人会員徽章が佩用され、予習教育及特別訓練を受けた者、青年学校を卒業したる者はそれへ其の章を佩用されていた。各自の服装及奉公袋の色は変れど天皇陛下の赤子として御国を護る誠は微々たりとも変わらず、尽忠報国の精神を等しく肝に銘じて集合した。聴て集れの号令一下第一分隊既教育兵・第二分隊本籍地の補充兵・第三分隊寄留者の補充兵と二列横隊にコの字形に並ぶ。出席人員調査に氏名を呼べば皆はち切れる元気を以て答へる。非常時を背負ふ在郷軍人の意気は正に天をつくの概〔ママ〕がある。一人の不参者も遅刻した者も無い所を見て各自の職業は変れど一旦有事の際の団結力はこれ程強いものであるぞと云ふ事が実証される。これでこそ北支中南支に転戦する陸海軍の勇士が破竹の勢を以て進撃する時どんな強敵をも破る事が出来るだ〔ママ〕と感じた。

既教育兵の中より分隊長を決定して前へ一列並ぶ〔ママ〕。「気を著け」の号令が掛った。和田曹長殿は大声で「俺は和田曹長である。今日一日は入営兵と同一に扱ふ。今から少し注意を述べる。善く覚えて置け」と云はれ、先づ「自分の服装に注意せよ。ボタンは外れて居ないか？徽章が曲つて着いて居ないか？曲つて居たらすぐ直せ」と云はれ「汗が出たと云って勝手にハンカチや手を使ったら承知せんぞ。便所は

あそこだ。喫煙場はあそこだ。点呼場より出てはいかん。命令に服従せん者は陸軍刑法によって罰せられるぞ」と注意を述べられた。

終つて簡閲点呼執行官富倉武夫中佐殿が静かに壇上に立たれた。敬礼の号令が掛り注目した。そして又注意を述べられた。終つて「小林小尉〔ママ〕和田曹長助手を命ズ」と云はれ次に前に一列に並ぶ。既教育兵に対し第一、第二、第三分隊長及衛生班長を命ぜられ、それへ所定の位置に着いた。

執行官も壇上より下りられ続いて閲兵式が行はれ富倉中佐殿を先頭に小林小尉・和田曹長及区兵事係の方が続いて来られた。

「第三分隊頭右」の号令が掛つて注目して執行官に視線を注ぐ中を通過された。

次に官性〔姓〕名を名乗った。第一分隊より初まつていよ々々自分達の番となつた。姿勢や敬礼の悪いのはびしへとやり直しをさせられた。後列の十番であつた自分は号令を掛ける係となつた。「前へ」の号令で年長者二名と共に二歩前進した。余り固くなり過ぎて敬礼の時上官が手を下さぬ内に下してやり直しを命ぜられた。再び敬礼をした。答礼があつて「補充兵電信兵下平正熙〔ママ〕」と大声で名乗った。次の二名も済んで「右向け」「かけ足」の号令を掛けて前の班へ続いた。そこで点呼令状を出して補充兵証書へ第一回の点呼済の印を押して戴いた。

これが済んで第一分隊と第三分隊は奉公袋の内容検査が行はれた。前列と五歩離れて片手間隔で整列して奉公袋の内容品を出して一目分る様に並べて補充兵証書を手に持つて不動の姿勢で待つた。第三分隊の中には奉公袋も証書も持たずに参会した者が居て大変叱られて居た。上官が通過するとほつとした。終へて第一分隊の休憩〔憩〕して居る所へかけ足で集つた。そこで〔で〕第二分隊の奉公袋の検査が終る迄小林小尉殿より陸軍編制の改革及今次事変よりもソ連兵の重大な事件及張鼓峰事件について、現役軍

人が敵の爆撃下にあつてよく命令に従つて一歩も退かず国境より一歩も出でず、不利な地形にて巧な敵の攻撃を廃〔排〕除して敵軍の心胆を寒からしめた皇軍の奮闘物語りを聞いた。其の間に第二分隊も終つて分列式が挙行せられた。今度は第四分隊に別れて〔ママ〕整列した。各分隊二列横隊となりて各前列より一列に行進した。執行官の前を通過する時に「頭右」の号令が掛つた。注目して通過した。「直れ」の号令が掛り堂々と闊歩した。分列止れの号令が掛つて前列に続いた。

全員終つて今度教練が行はれた。先づ既教育兵の教練から初まつた。銃を肩にして歩調をとつて一糸乱れぬ行進は見ても気持のよいものだ。急に「折敷け」の号令が掛かつてびたりと座つて止つた。「立て」の号令「廻れ右前へ」伏せの号令が掛けられても列を乱さずに行ふ所は流石教育を受けた軍人であると痛感した。一番勇ましかったのは「突撃」の号令に「突つ込め」の号令が掛つた時であつた。ありつたけの喊声をあげて突込み、命令通りに一列にびたりと止つた様子は実に見事なものであつた。自分も予習教育の時夜七時半より二三時間づつ学科を習得して後、「歩調とれ」から初まって「駆足」「並足」「右へ向を替へ」、解散してすぐ「集れ」「折敷け」「伏せ」を、最後の夜は木銃を以て「突撃」「突つ込め」の練習を汗だくで教はつた事を思ひ出し乍ら見学した。上空では横浜海軍航空隊所属機が戦闘演習を盛に行つて居た。

今度は未教育兵の番となつた。奉公袋は各自腰に結び四列徒〔縦〕隊になつて両手間隔に並び、前列が二歩出てから続いて全員歩調とつて行進した。「廻れ右前へ」の号令が二度掛つた。不動の姿勢で大手を振つて堂々闊歩する。其の意気で既に敵の機先を制するのだと予習教育の時教官より教はつた事を思ひ出した。進行中に「折敷け」の号令が掛りびたりと止つた。列の違つて居ない所を見ても全員間違はずに出

来た事が分つた。これを以て戸外点呼は終つて十五分間休憩して十時半より整列して静かに体操場へ入つた。全員一同脱帽で着席した。「気を著け」の号令が掛つて全員起立した。団歌・君が代の奏楽裡に式は初まつた。

執行官の富倉武夫中佐殿は敬礼し乍ら壇上に上られた。静まり返つた室内の後方より和田曹長殿より恭しく勅諭〔諭〕が捧げられた。「最敬礼」の号令が下つた。執行官は恭しく開かれて力のこもつた声で奉読せられ全員は起立した。

「我が国の軍隊は世々天皇の統卒し給ふ所にぞある」と厳かに奉読せられた時には戸外点呼の時の恐い執行官が余計に尊い方に見えて自然と心が引締つた。続いて昭和の勅諭〔諭〕、在郷軍人に賜はりたる勅語が奉読せられ、最敬礼の後和田曹長の足音と共に恭しく持帰られた。一同着席した。

今度は学科の回答〔ママ〕が行はれた。初に軍が戦時又は非常の場合軍隊を編成する為在郷軍人を召集する命を何と云ふかと問はれて、自分も手を揚げた。既教育兵の方に指名されて「臨時召集」と答へて誤ひ〔ママ〕、充員召集と臨時召集との違ひや其の期間に於て充員召集は三四日しか余裕が無いが臨時召集には相当の期間があるのもあると説明せられ、何れも赤紙で来るから他の書類や令書と間違はぬ様注意された。次に「本人に代つて召集命書を受取る者を何と云ふか」と問はれ未教育兵に指名され「通報伝達人」と答へた。そして受取つた時刻を記入して印を押して半分返す事や、早速本人に渡す様に注意を述べられた。次に余裕の無い召集を受けた場合又は不可抗力で隊へ間に合はないと云ふ場合には、すぐ憲兵分隊又は市区兵事係へ出頭して其の筋の手続をとれ、まごついて無駄な時間を過し違反にならぬ様に、召集の期日には必ず入る様にせよと云はれた。兎に角第一に出動す可き在郷軍人は何時召集が来ても本人が留守でもまごつかない様に、旅行する時は親又は妻等に善く常識を知らせて置いて立派に出

征出来る様にして置けと云はれた。

終つて今度は時局講話があつた。我々の覚悟に就いて日支事変より日ソ両国の重大なる事件に就いて、又張鼓峰事変で解決したと思ふのは大間違だ、次に英国・仏蘭西が大敵である事に力を入れて説明された。現在支那蔣政府を押し立てて武器弾薬を援助してこの事変を永引かせて居る。日本は孤立無援の立場にある。お前達はよく自覚して完全に聖戦の目的を達せしめる様に注意せよと訓示があつた。次に執行官と磯子区長鈴木様の辞が朗読せられた。終つて今日簡閲点呼の成績〔績〕に就いて発表せられた。六七名は召出されて此の者は初めから終りまで動差〔作〕が特に優等であつたと賞められて敬礼して去つた。

次に全員起立して帝国在郷軍人会々歌が〔を〕高々と合唱し其の声は体操場へ響き渡つた。これを以て時局重大なる時意義ある又自分としては第一回の簡閲点呼は終つた。我々は益々義務を果す可く肝に銘じて高々と万歳三唱して閉会した。

昭和十三年八月二十三日²⁵

史料2 召集令下る

応召日誌

召集

昭和拾四年四月七日、自分の処へも名誉ある召集令状が下つた。同月九日午前八時横浜を盛大に歓送下さつて一路故郷へと向ひ、同十四日午前六時懐しの母校上郷尋常高等小学校を盛大に送られ同十五日午前九時電信第一聯隊の営門に入り体格検査の結果残念にも即日帰郷を命ぜられて仕舞つた。其の間自分の心持行動を思ひ出せる儘に書いて見た。

一、召集の通報を受けて

四月七日午後二時四十分、自分一人店番をしてお客様に時計を販売して居た時、市外通話らしく電話が鳴り響いた。受話器を耳にあてた。幾つも幾つも繋がつた。長野県下伊那郡上郷村と聞えてきてはと思つて緊張して聞いた。下平正熙へ〔ママ〕臨時召集が下り四月十五日午前十時電信第一連隊へ入隊との通報を受けた。心を取り乱しては恥としつかり答へて電話を切つた。お客様の応待もはっきりやつたが激しい心臓の鼓動文は止める事は出来なかつた。お客様が帰られてから取敢えず横浜生糸検査所へ出張中の主人の処へ電話を掛けた。荷物を整理して居る様に云はれたが、片付けるのも思ふ様にはかどらなかつた。

夕方になると皆帰つて来られた。令状の話をするに皆びつくりした。中には本気にしない者さえも居た。其の中主人も御帰りになり色々プランをたて、下さつた。主人方はなる可く親の処へ多く置いてやり度いと云ふ思ひやりで、九日午前八時当店出発と云ふ事にきめて下さつた。明るる八日は押明ける様な大雨が降つた。雨の中を組合又は方々へ通知して下さつた。午前十時長旗と赤襷を下さつた。軍服も貸して下さつた。主人と軍人会第七班長の徳竹様と三人根岸八幡社へ同道下さつた。神主はのりとをあげ身を清めて下さつた。玉串奉奠をした。一層神々しさを感じた。

午後には雨も止んだ。磯子区役所兵事係へ挨拶に行き、荷物をまとめて桜木駅へ行きチツキに掛けた。主人より牛肉を御馳走になつて帰つた。磯子警察署長様が挨拶に来て下さつて一礼して帰られた。夕飯には店の送別会とて天どんをとって下さつた。お内儀様は横浜市長様へ招待されて自分の為立派な国旗へ市長様御自筆で尽忠報国と書いて戴いて下さつた。無上の光栄に深く感謝した。

25 「(戦前ノート)」(4—その他 5-1-6)。「簡閲点呼」(昭和十三年八月二十三日)

夜は酒宴が開かれて大騒ぎをした。盃の数が重なるに従つて皆踊り出した。無芸の自分は大きな声で軍歌を合唱して一夜を過した。

二、横浜を出発

四月九日はからりと晴れた。よい天気であつた。自分はお赤飯を戴いて歓送下さる方々へ応答した。午前八時出発の時刻となつた。自分は軍服姿に赤襷を掛けて店頭に立つた。

国家君が代が奏せられて心の中は激しく湧き立つた。皇居遥拝をした。西根岸銃後連盟委員長長功七級海老坪様が厳かに祝詞を朗読下さつた。有難く拝受した。続いて自分は脱帽して大声で挨拶申上げた。「本日は日曜日にも拘はらず朝早くから自分の為盛大なる御見送下さいました事を謹んで感謝致します。入隊の暁は国家の為献身御奉公致す覚悟で御座居ます。銃後の皆様御体を御大切に。では行つて参ります」とはつきり申上げて敬礼した。次に主人が親籍〔戚〕総代として御挨拶申上げて下つた。終つて委員長の発声で天皇皇后両陛下の万歳三唱と自分の為万歳を唱へて下さつた。

これより行進が初まつた。各組合旗・楽隊・在郷軍人会旗・国防婦人会旗に続いた楽隊は大陸行進曲を吹奏した。自分は奉公袋をしかと握り万歳の声に送られて沿道の方々に答礼しつつ根岸橋へ向つた。火花へ点火される度にばた〜と爆発した。根岸橋にて御見送の皆様御礼申上げ車中の人となり、歓呼の声に送られて電車は静かに動き出した。桜木町駅で市役所よりの祝詞を戴き記念の写真を撮つて戴き、省線電車のドアが一せいに締めこら〜とすべり出した。主人は新宿迄送つて下さつた。汽車は一路懐しの故郷へ向つて走り出した。²⁶

史料3 入隊と即日帰郷

七、入隊日

四月十五日は待ちに待つた入隊日だ。昨夜の久保・財作との面会を思ひ出しつつ奉公袋の中へは臨時召集令状を入れてしつかと握りしめ主人に附添はれて車中の人となる。同じ隊へ入る人々が乗込んだ。もうすぐ友達となり共に第一戦〔ママ〕へ向ふ様な意気込みで満員の列車へ乗替へた。相模ヶ原より営門迄、手には国旗を持つて行く者、赤襷を掛けて行く者、附添の人々で広い道路が一ぱいだ。左へ曲り営門の歩哨に敬礼して入つた。上官が来られると衛兵は号令と共に一せいに立つて敬礼をした。上官が除隊されるらしかつた。万歳を叫んでごきげんようと云つて出て行かれた。

九時四十分頃集合した。松本・新発田、福島・宇都宮・水戸・麻布、本郷等の召集兵は各聯隊区別に整列した。

マイクロフォンを通じて今迄に通信技術習得者は呼出されて第一中隊へ入つた。自分等は第三中隊へ入つた。次に今迄に大きな病氣・伝染病に罹つた者、又はそう云ふ処へ手伝に行つた者、脚氣に罹つた者は前へ出ると云はれた。自分も出まいと思つたけれど前へ出た。病名を書いた紙を持たせられ、貴重品は奉公袋へ入れ、令状と今の紙を持つて第六班の兵舎へ入つた。冬衣・袴・袴下・軍帽・襦袢・靴・靴下・営内靴等が支給され指導に従つて着用した。立派な電信二等兵となって皆喜〔嬉〕しさうであつた。班長殿に引卒されて体格検査場へ入つた。身長・体重・胸囲・関節・蔭部・紅〔肛〕門を調べ、聴診器をあててよく調べ次の室へ廻された。しばらく待つて再検査の結果脚氣の為残念にも令状へは乙の印を押されて悲しい即日帰郷を命ぜられて仕舞つた。すご〜と仕度して六班の兵舎へ入つた。皆おいしさうにたべる軍隊

26 「〔戦前ノート〕」(4—その他 5-1-6)。「応召日記」

のお赤飯も自分ばかりはおいしくなく半分程残して洗った。

班長殿に詫びた。班長は「お前は帰つて養生しろ。この儘無理をすればお前の体は駄目になる。よく直して地方で働け」と云はれた。喜んで着た軍服ともお別れだ。三中隊よりの帰郷者八名と共に(人事係中隊長殿)(准尉)の処へ行き計〔経〕理へ廻されて旅費を支給された。入隊した者は帯剣で隊伍堂々と入つて行つた。自分は兵舎を振り返りつつ主人に慰められつつ帰つた。寺澤君も其の一人であつた。皆様よりは盛大なる御見送下さつて自分も張り切つて出掛け、同じ召集兵とは生死を共に誓つて出発したのに、即日帰郷とならうとは誰が予想した事であらう。熱誠溢れる歓呼の声、旗の波が目の前に浮んで来て御期待に副ふ事も出来ず申訳ないのと残念なので胸が一杯であった。緊張した為か急に過激な運動をした為か脚氣に罹つた事も気が付かず、天皇陛下の御為、国家の為何一つ御役に立たず今回の軍隊生活は終つた。今後は

健康に意を注ぎ再び銃後の一員として励み、大君の為皆様の為万分の一も報ゆる可く強く強く誓つた。

昭和拾四年八月廿日、 書写ス²⁷

*史料番号に続くタイトルは吉崎が付したものである

<附記>

本日記ならびに関連資料の紹介にあたっては下平政熙氏の長男・下平修嗣氏より、ご理解ならびにご助言をいただいた。心よりお礼を申し上げます。

また、本日記の内容にかかわる様々な事実を教えていただいた下平忠孝氏、アリガ・キミコ(紀美子)氏、渥美紳一氏にも深くお礼を申し上げます。

27 「(戦前ノート)」(4—その他 5-1-6)。「応召日誌」